泡鳴五部作

――映画文学人生論

岩野泡鳴 (1873-1920)
『発展』（1911）「大阪新報」「實業之日本社」
『毒薬を飲む女』(1914)　「中央公論」
『放浪』(1910)　「東雲堂」
『断橋』　(1911)　「毎日電報」
『憑き物』(1918)　「新潮」

おれは宇宙の帝王だ。否、宇宙そのものだ

岩野泡鳴は詩人、哲学者で、島崎藤村や田山花袋とならぶ自然主義の作家と名前だけは知っていたが、作品はこれまで読んだことがなかった。

一般読者には今やほとんど読まれていないようだが、一部の文芸評論家の間では評価され、たとえば、河上徹太郎は、「明治文学史を通じて偉大な小説は沢山あった。然し偉大な小説家は岩野泡鳴はただ一人である」と言っている。

藤村、花袋、さらには漱石や鴎外より偉大な文学者だとすれば無視できないと思って、『発展』『毒薬を飲む女』『放浪』『断橋』『憑き物』という順番で『泡鳴五部作』を読んでみた。

明治四十一年五月から四十二年十二月までに泡鳴自身が体験した実生活を素材とし、神秘的半獣主義（刹那主義）、生々主義、一元描写論などの思想で味付けした自然主義的私小説である。

主人公の田村義雄は商業学校の英語教師だが、実行刹那主義の哲理を主張して文学界でその名を知られる小説家でもあった。麻布の我善坊で下宿屋を営む父親が病死したので、家督をついだが、下宿屋のおやじに甘んじるつもりはない。面倒くさい仕事はすべて妻にまかせた。

はたから見ると、恵まれた境遇だと思うが、義雄はその程度の生活には満足できない。下宿屋を担保にして資金を調達し、樺太で蟹の缶詰製造するという事業を思いついた。

泡鳴五部作 ――― 映画文学人生論

現在、樺太は日本の領土ではないが、当時は日露戦争の結果、樺太の南半分が日本領になっていた。蟹の缶詰を製造し、欧米に輸出して外貨を獲得するのは国益にもかなう有望な新事業だ。

しかし、文士風情が自宅を担保にした資金で実行して成功するほど事業は甘くはない。たちまち資金がつき、樺太から逃げ出した。東京には妻子があり、お鳥という妾もいるが、尾羽打ち枯らした身で、どの面さげて、帰れようか。

知人の教師や新聞記者を頼って、しばらく北海道で放浪することになった。少しでも手元に金があれば、薄野の遊郭で遊び、敷島という女に入れあげる。そこへ東京からお鳥がやってきた。以前にうつした性病が完治していないので、治療費を出してやらなければならない。

たまたま伊藤博文がハルピンで暗殺されたという凶変に接したとき、義雄は中学校の演説会に招かれた。伊藤公は彼の尊敬する人物であり、公について語ることは自分自身を語ることであった。

やがて興奮のあまり、「おれは宇宙の帝王だ。否、宇宙そのものだ」と叫んだ。聴衆の笑い者になったという噂を聞いたお鳥は、「え、気違ひになったと云ふじゃないか」とすすり泣きをした。

何の為に、僕、
樺太へ来たのか　わからない
蟹の缶詰、何だ　それが？
、酒と女　これも　何だ？